

若者の生きづらさを減らすための
第三の居場所は、
どうあるべきか？

名城大学附属高等学校 3 年

吉川 真由

1. 動機

本研究の動機は、心理的な苦痛や孤立感が個人の日常生活に及ぼす深刻な影響を軽減し、自分らしく過ごせる社会を構築するための取り組みを促進することにある。私自身が、心理的な苦痛や孤立感に直面し、その辛さを一人で抱え込んできた経験から、これらの問題の深刻さと対策の重要性を痛感してきた。また、周囲の友人や同世代の多くが、同様の困難に直面し、学校や人間関係、家庭環境における生きづらさを抱えている現状も、本研究の動機を後押ししている。このような状況を踏まえ、心理的な苦痛や孤立感を軽減し、個人がより自分らしく過ごせることができる社会を構築するために、本研究が一助になれば良いと考える。

【実現したい未来】 「不安・生きづらさを減らして、自分らしく過ごせる社会」を目指している。

2. 背景と目的

【生きづらさの実態】 日本における若い世代の生きづらさや孤独・孤立が現代社会の課題となっており、若者の現状を示す数値は厳しい。

- ・約80%が「生きやすくない」と感じている¹。
- ・15-19歳の44.6%は孤独感があると答えている²。
- ・13-29歳の20%が悩みを誰にも相談しない³。
- ・15-19歳の3人に1人が自殺を考えたことがある⁴。

若者が、閉そく感や同調圧力等で、不安・悲しみ・恐れ・苦しみを感じており、孤独や生きづらさの解決策として第三の居場所が注目されている。

【定義：第三の居場所とは】

第三の居場所は、第一の居場所が家庭、第二の居場所の学校や職場、それ以外が第三の居場所になる。提唱者のレイ・オルデンバーグは、第三の居場所 (Third Place) は、「居心地の良い居場所。様々なプレッシャーから解放され素の自分に戻れる、人を平等にする、気楽な場所。近い場所。会話が主な活動」と定義した⁵。また湯浅誠氏は、認められる場所に居場所感を抱くと説明した。これらを、本研究の第三の居場所の指標とする。

【行政の取り組み】

実態として、子ども家庭庁は専門部会を設置。子どもの居場所づくりを支援する地方自治体は5年前に比べて3.6倍増えている。子ども食堂への支援の他、遊び場、無料塾、世代間交流ができるサロン運営など行われている。

【居場所のニーズ】

実際に、2022年度に子ども家庭庁が行った調査によると、7割以上の若者が「家や学校以外に居場所がほしい」と回答し、16歳以上の若者の4割程が「居場所がない」と回答している⁶。孤独や孤立に苦しむ若者たちが、ありのままの自分で、輝き生活できる社会になると良い。

【本研究の目的】「若者の生きづらさを減らすための、第三の居場所は、どうあるべき？」

本探究では、不安や生きづらさの解決方法の一つである「第三の居場所」の取組に焦点をあてた。若者のつらさを和らげる第三の居場所の現状と課題を明らかにし、解決策について検討した。この研究により今後ニーズに添った第三の居場所運営に少しでも役に立てばと考える。

【本研究の経緯】

若者の不安や生きづらさを解決する研究を始めたところ、家庭や学校を生きやすい場所に変えるのは難しいということ、居場所づくりで課題解決の糸口を探してみることにした。まず2022年度 SPIRAL 事業という課題探求活動を通して、不登校児や発達障害者らを対象とする居場所の調査をした。対象者のニーズに応えた質の高い事業に訪問し、社会や若者の役に立つサービスの数々を知った。居場所の訪問を始めて半年ほどしてから、いわゆる普通と言われる一般の若者を対象とする第三の居場所の実態調査を開始した。また、トビタテ留学 JAPAN を利用してユースワークの発祥の地であるイギリス・ロンドンの居場所の調査を行った。更に、高校の研修の一環で、ニュージーランドやインドネシア・バリでの居場所や若者の悩みや不安に関する調査を実施した。それぞれの国の実態を知ることで、日本の実態と比較ができ、多くのヒントを得ることになった。

3. 方法

研究目的を達成するため、まず初めに定性的手法を活用した。実際の居場所に訪問し、調査対象者と対面するインタビュー法、観察法、フィールドワーク法を用いた。また、資料探索法を用いて、関係文献や雑誌などの資料の探索を行った。定量的手法としては、アンケート法を用いて、実際に調査対象者にアンケートを行った。

調査①若者の第三の居場所 20 か所以上に訪問し、対面インタビューやフィールドワークを通して調査を実施した。

【内容】第三の居場所とは、どんな居場所か？ 若者の生きづらさや孤独・孤立の解決に役立っているか？

【調査対象】

表①

◎不登校児・貧困者・障害者を対象とする居場所	◎一般の若者を対象とする第三の居場所
<ul style="list-style-type: none">・ミライデア (南区)・グロウアップ岡崎 (岡崎市)・よろず心のクリニック (岡崎市)・コネクトスポット (岡崎市)・あしたもえがお (中川区)・一般社団法人 DiVE.tv (中村区)・名古屋子ども若者総合相談センター (中区)・社会福祉協議会が運営する引きこもり支援の居場所 (中村区)・中川区自立支援連絡協議会はばたん (中川区)・全国障害学生支援センター (町田市)・名身連第二デイサービス (中村区)	<ul style="list-style-type: none">・MEGURU HOUSE (中川区)・ユースクエア (北区黒川)・オープン型交流スペース もいもい (金山)・英国のユースセンター、プレイグラウンド、図書館、喫茶店・ニュージーランドの小学校のグラウンド、高校の中の居場所・みんなで駄菓子屋 (仮)：小中学生が勉強し楽しむ場 (中村区)・児童館：金曜日の夕方に開催される中高生タイム (中村区)・えがおの架け橋：子ども食堂における料理教室 (中村区)・ひとなる図書館 (豊橋市)・セルフカフェ・名古屋市青少年交流プラザ分館(青少年宿泊センター) (緑区)

調査②若者の第三の居場所等に関するアンケート実施

表②

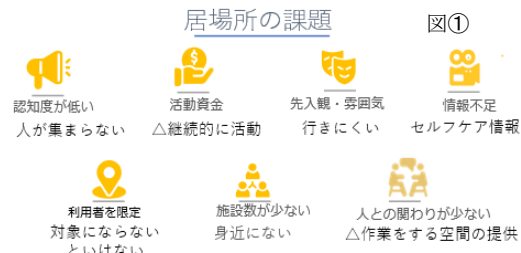
① 【対象】 ロンドンの語学学校に通う若者 (2023年8月) 【内容】 不安を感じた時の解決法、第三の居場所の調査。	② 【対象】 名城大学附属高等学校に通う生徒と教師 (2024年2月) 【内容】 生徒研究発表会で、本研究結果発表後、感想調査
③ 【対象】 インドネシア・バリのウブドの高校生、(2024年3月) 【内容】 不安を感じた時の解決法、第三の居場所の調査。	④ 【対象】 全国の日本の高校生 (2024年3月) 【内容】 理想の居場所の調査 (BEAU LABO 地域コミュニティラボ)

4. 結果及び考察

調査を通して、居場所の課題として7つが明らかになった(図①)。

そして、一部の課題の解決策についても検討した。

- ① 「認知度が低い」→「活用されていない」
- ② 「活動資金が限られている」
- ③ 「先入観があり・雰囲気が入りづらい」
- ④ 「不安解消・セルフケアの情報の不足」
- ⑤ 「利用者を限定している」
- ⑥ 「施設数が少ない」
- ⑦ 「人との関わりが少ない」



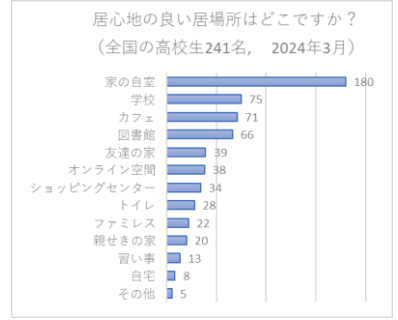
【第三の居場所の運営側が感じていた課題】

① 「認知度が低い」→「活用されていない」:

第三の居場所の一つ目の課題としては、認知度が低く、利用者が集まりにくいという課題があった。名古屋市にある若者の為の第三の居場所であるユースクエアでは、「近所の子たちは良く来てくれる。でも、決まった子しか、来てくれない」と事であった。名古屋市のオープン型交流スペース もいもいでも、広報の課題があげられていた。広報不足で、施設の認知度が低く、利用者が限られているとの事。対象者である若者が施設の存在を知らず、多くの利用者が、気軽に集まれる場所に必ずしもなっていないのが現状である。

グラフ①

全国の高校生へ居心地の良い居場所についてアンケートを実施(グラフ①)したところ、自治体や地域の中にある「第三の居場所」をあげる生徒はいないことから、存在自体がないか、活用されていないか、認知度が低いと考えられる。その他、この結果からわかることは、自宅の自室を居心地の良い場所として選んだ学生が全体の75%、30%の学生が学校と答えた。学校と家以外の居場所として、カフェ(29%)、図書館(27%)、友達の家、オンライン、ショッピングセンター、ファミレス、親せきの家と続く。なにより、高校生の3分の1が、自宅と学校のみを居場所としており、家と学校以外の第三の居場所を持っていないことも分かり、同様の居場所の有無を聞く調査とほぼ同じような結果となっている。



学校の生徒発表会では、約200名に向けて第三の居場所について10分ほどの発表を行った。発表後、生徒からのコメントで「そんな場所があるとは知らなかった」「発表でされた第三の居場所を、ずっと欲しいと思っていた」などのコメントを実に沢山得た。認知度の低さを再認識する一方で、居場所の利用に関して前向きなコメントが多く高校生からの需要があり、広報の必要性を感じた。

第三の居場所の認知度を上げるには、広報用のカードの配置場所の工夫、広報等の利用促進などに加え、魅力的なイベントや行事を行い、口コミを促進する必要がある。

② 「活動資金が限られている」

活動資金が限られている為、施設の利用頻度が、制限されることがある。第三の居場所の開催時間として、子ども食堂は月に1回だったり、児童館の中高生の時間週に数時間だったりする。活動資金の不足等から、近所の子ども食堂の活動も今年度から数か所終了し、活動を継続的に行う困難さが挙げられてた。第三の居場所のスタッフの雇用形態も決して安定しておらず、安い賃金で働いているとの意見もあった。

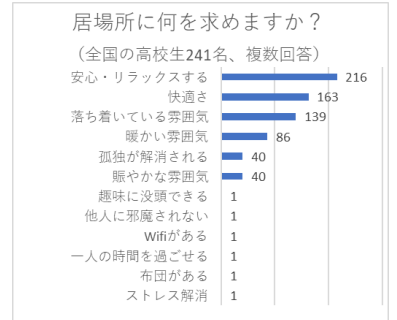
若者向けの支援を長く行っている英国の例をあげると、若者支援の財源削減にともない、公的機関としてユースセンターの数が激減している。ロンドンのユースセンターも例外ではなく、2011年には299か所あったが、2021年には133か所と減っている。英国のユースセンターでは、財政難をカバーするために、寄付金の募集案内を全てのウェブページに表示させ、寄付活動につながりやすい仕組みがされていた。今後、このような第三の居場所を、持続的に続けていくための財政的な仕組みづくりが求められるであろう。

グラフ②

【第三の居場所の利用側の課題】

① 「先入観があり・雰囲気が入りづらい」

若者を対象とした第三の居場所を訪問したところ、個人的に感じたのは、初めて訪問する者への案内がなく、どの様に入ったらよいか分からず迷ったり、入りづらかったりすることが多々あった。第三の居場所は、初めて訪れる者への案内に工夫が必要である。例えば、指示案内、初めての利用者に対する施設の利用方法や活動内容紹介がされたりするのが良い。また、若者の居場所として、生涯学習センター、図書館、児童館などもあるが、施設によっては、利用する若者が少ない。それは、様々な原因があるものの、先入観として堅苦しく冷たく古びた印象があることも一因としてあげられる。



利用者の考えを明確にするため、全国の高校生に「居場所に何を求めるか」のアンケートを行った(右図)ところ、安心・リラックスする、快適さ、落ち着いた雰囲気などが上位を占めた。第三の居場所は、居場所の雰囲気づくりの工夫が重要である。

居心地の良い居場所を作るために、以下の場が参考になる。例えば、オープン型交流スペースもいもい(写真①)は、おしゃれな優しい青と緑色の室内にハンモック、ゲームや勉強をする場所があり、居心地の良い空間が作られていて、快適な環境がある。ユースセンターも、図書コーナー、楽器コーナー、じゅうたんスペースなど、それぞれ気に入った場所を探してのびのびと過ごせるような施設になっている。入りにくい児童館も、勇気をもって一歩踏み込んでみると、卓球、バトミントン、ドラム、スイッチなどで気軽にのびのび遊べる施設になっていた。このように、それぞれの居場所で居心地の良さを追求している事を知った。



写真①

② 「不安解消・セルフケアの情報不足」

英国やニュージーランドの居場所に訪問して、まず初めに目に入ったのが「ティーン向けの雑誌」(写真②)が山積みになられていた事である。図書館にもマインドフルネスやセルフケアの本が、ユースコーナーに多数配架されていた。10代のための雑誌には、自己肯定感をあげ、自分で自分を楽しくさせる方法が具体的に記載されており、気軽に情報が手に入る状況なのが印象的だった。



写真②

一方で、日本の若者の居場所には、あまり不安解消・セルフケアの方法を示す書籍や雑誌は置かれていない状況であった。厚生労働省「全国家庭児童調査」(平成21年度)によると、高校生等の84.9%が何らかの不安や悩みを抱えている。多くの若者が不安や悩みを抱えているものの、第三の居場所には、悩んでいることの解決策案について書かれている本や雑誌が目につく場所に配架しておらず、若者が自由に必要な情報を手に入れられる状況とはいえないのではないかと感じた。日本の若者たちが、悩みに行き詰ったときには、いろいろな対処法を試せるように、必要とされている情報が伝わると良いのではと考える。

今回、若者たちの不安や悩みと解消方法についても調べた。日本の事例としては、港区787名に調査した結果が参考になる。「高校生世代の約8割が、進路や勉強、外見など何らかの悩みを抱えている。悩みの相談先は、友人、母親が約7割と多く、父親は3割、学校の先生は2割に過ぎない。約1割は、相談が面倒等を理由に、悩みを抱えても誰にも相談しない。」との事であった。

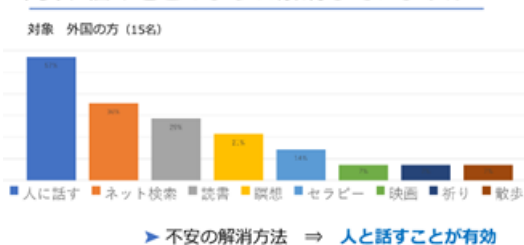
ロンドンの語学学校に通う外国の方は、全員が将来への不安等悩みを抱えており、対処法として「人と話すこと」「ネット検索や読書の情報収集」等で不安を解消していた。また、瞑想・セラピー・祈りなどの出身国により方法の差異が見られ、文化による傾向がある事がわかった(グラフ③)。

インドネシア・バリ島のウブドの高校生に悩み事についてアンケートしたところ、明るい性格とは裏腹に、「全ての学生が複数の悩み」を抱えていた(グラフ④)。そして日本の高校生と異なり「お金や人間関係の悩み」も多い。その解消方法は多様であったが「音楽や誰かに話すこと」が上位になった(グラフ⑤)。インタビューをした際には、インドネシアでは現在、日記を書くブームで、悩んだ時に日記を書く習慣もあるとの事。悩んだ時に、誰に相談するのかを聞いたところ、友達や家族のみで、先生やカウンセラーには全く相談していないという特徴もあった。

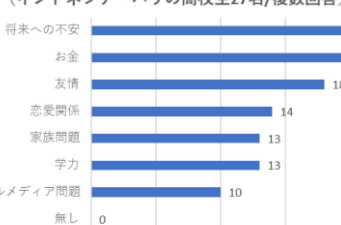
日本の港区の学生は8割が悩みを抱えていたが、世界中の若者たちも悩みを抱えていた。悩みの内容は、将来の不安が多く、それぞれの文化の中で、悩みの解消方法が偏りがちであることも分かった。様々な不安解消方法を知り、若者たちが、自分に適した方法を選んでいくことができた良いのではないかと考察した。若者の居場所で不安解消やセルフケアの様々なノウハウが学べ、情報が容易に入手できるのが望まれる。

グラフ⑤

グラフ③
不安や悩みをどのように解消していますか？



16-18歳の高校生の悩み事 グラフ④



悩みがある時、どのような行動をとりますか？



【第三の居場所の個人的に考察した課題】

① 「利用者を限定している」

若者の居場所は、貧困・不登校・発達障害など対象を絞った居場所が多く存在する。これらの居場所の多くでは、人との交流が活発で、以下の様な取り組みを通して、不安や生きづらさを少なくする工夫がされていた。表③

居場所名	居場所感をいづく取組
ミライデア	不登校児童の自立へのステップアップを応援している。「相手を否定しない」というのが大きな指針となっているのが魅力である。様々なイベントが毎日行われており、料理教室などもある。また、親への支援サービスがあるのも家庭から変えていける可能性を秘めている。
グローアップ岡崎	不登校の若者が多く利用している。自分で決めることを大切としていて、失敗も学びとしてチャレンジすることができる。ランチとその後の昼休みの時間には人と関わる遊びなどを充実させている。また、保護者サポート、医療との連携もある。
コネクトスポット	障害を持った若者が利用しており、俳句を作る利用者、ホワイトボードで自己表現する利用者など、好きなことをして自分らしい環境づくりをしている。
あしたもえがお	障害児デイサービス。遊びなどを通して人間関係が築かれており、人との出会いを通して学びや成長をサポートしている。
はぼたん	何もできなくなってしまううつ病者の当事者団体で、当事者同士の関係作りを通して、少しずつできる事を増やしていき、若者が元気になっていく事例を伺った。

これらの居場所では、若者が、生きやすくなるための様々な手厚いサポートを受けられており、その機会があることに感銘を受けた。しかし、全ての若者が通えるわけではなく、不登校、発達障害、貧困など対象を絞った「特定の人」にならないと、利用できないという点があった。放課後等デイサービスなどでは、診断書を病院でとり、役所に申請してやっと利用できる施設もあり、必要性を感じても、診断が下りなかったり、親や本人が診断を拒否したりして通えない現状もある。若者を分類して支援する必要があるからではあるが、実際には、いわゆる普通の多くの若者も不安・孤独・生きづらさを強く感じており、若者一般にも手厚いサポートや、居心地のよい居場所が必要とされている。

② 「施設数が少ない」:

いわゆる普通の若者が訪問できる第三の居場所は、施設の絶対数が少なく、身近にないことが多い。ユースケア(名古屋市のユースセンター)では、近隣に住む子どもや若者が主に施設を利用し、遠方から来てくれる人は少ないとヒアリングで分かった。また、子ども家庭庁のこどもの居場所づくりに関する調査研究報告(p.34)によると、「居場所に来られる子ども・若者は少ない」と記載しており、利用者が限定的であることがいえる。

英国には、多くのユースセンターやプレイグラウンドが若者たちの第三の居場所として整備され長い歴史を築いている。その若者の居場所の施設数を比較してみると、ロンドンやニュージーランド、そして京都には、1-2km毎に点在している(図②)ものの、名古屋は数か所と非常に少ない事がわかる。

ニュージーランドには、ユースセンター以外の居場所として、小学校のグラウンドが放課後に解放されて、居場所になっていた(写真③)。放課後のグラウンドでは、バスケットボール、スケートボードなどで若者がのびのびと遊んでいた。副校長によると、利用時間やルールも厳しくしていないとのことで、多くの子どもや若者達に活用されているとの事であった。また、高校の校内の居場所も日本とは異なり、授業中に1人で休憩ができる空き教室(ソーシャルスペース)や、会話や飲食が可能な図書室があった。

更に、ロンドンの語学学校に通う海外の方の第三の居場所をアンケートしたところ(グラフ⑥)、図書館、カフェ、ジム、バイト、課外活動など多様な居場所があることがわかった。このように、若者支援に特化した施設でなくても、「多様な居場所が身近にあると良いのでは?」と気づかされる結果となった。

③ 「人との関わりが少ない」:

日本の若者の為の第三の居場所を訪ねると、多くの場所で、「個人で作業をする空間」として活用されている傾向がある。オープン型交流スペースもいもいも、来ている8割程の若者が自習しているという。関わりを持つ時間も余裕もないのが現実かもしれないが、自習する場所は、本来目指している居場所とはいえない。居場所感が味わえる人と交流できる居場所や、何もできなくても人から認められるような関わりができる場所があってもよいのではないかと考察した。

参考までに、イギリスのユースセンターでは、若者グループの活動。女子グループの活動など、人との関わりを作るプログラム(写真④)多くの場所で作られていた。また、音楽室、体育館、ロッククライミング、コンピュータールームなどを活用して、音楽、運動、ダンス、料理等の活動が毎日の様に提供されているところが、日本と異なる。

更に「人と話す活動」が、イギリスで開催されていたのも印象的であった。例えば、公共の図書館で週1回、紅茶を飲みながらお話をする会を開かれていた。また、コストコーヒー(喫茶店)でも、ボランティアを中心として、週1回何時間かを、お話をする時間として設定してお話する会を行っていた。このように、人と話す機会づくりを積極的に行っていた。

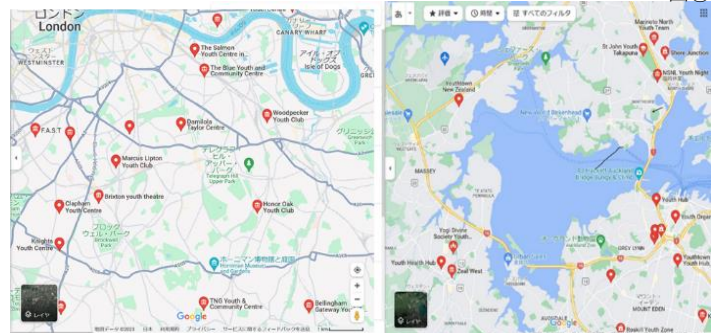
さて、日本において一般の若者の居場所では、上に述べたように、人と関わる活動は少ない傾向がある。しかし、人との関わりあいを大切にしている若者の居場所が何か所も散見された。例えば、MEGURU HOUSEは、何より相手を尊重するあたたかい雰囲気が魅力で、食事の無料提供があったり、手作りの作品を作ったり、優しい色合いの中で安心してお話をすることができる。また、名古屋市青少年交流プラザ 分館(青少年宿泊センター)も、人との関わりあいを重視しており、スタッフの方達と若者たちは、会話や交流を楽しみ、スタッフと若者との良い関係作りがされており、気持ちの良い居場所空間が作られていた。人との関わりあいを大切に、互いを認め合う居場所にするには、施設の方針とスタッフの人柄が鍵になりそうな印象を持った。

5. 結論

本研究を通して、日本の若者のための第三の居場所における7つの課題と対策案を明らかにした。

- ① 「認知度が低い」 → 居場所を知りたいニーズは高い。広報用カードの配置を工夫する等広報ツール見直し。イベントや行事でロコミを促進。
- ② 「活動資金が限られている」 → 公共予算は限りがある為、英国の事例などから、将来的に寄付活動などの仕組みが導入されることも考えられる。
- ③ 「先入観があり・雰囲気が入りづらい」 → 初めて来る人が入りやすい指示案内、利用案内、気持ちよく過ごせるための各種工夫が必要。
- ④ 「不安解消・セルフケアの情報の不足」 → 雑誌や本等必要な資料が手に取りやすい形であると良い。多様なセルフケアの手法を知れると良い。
- ⑤ 「利用者を限定している」 → いわゆる普通と言われる若者も、ニーズに合わせたサポートを受け、生きづらさが減らせる居場所があると良い。
- ⑥ 「施設数が少ない」 → 公的第三の居場所だけでなく、気軽に利用できる多様な形態の居場所が、身近にあると良い。
- ⑦ 「人との関わりが少ない」 → 若者を対象とした様々な活動が活発になると良い。人と話す時間を作っても良い。施設の方針と人選も大切。

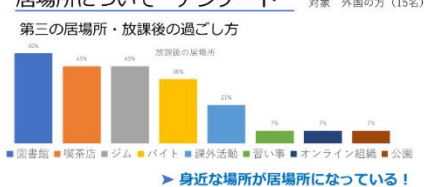
ロンドンはほぼ、1%ごとに点在 ニュージーランドは、1-2キロに点在 図②



写真③



グラフ⑥ 居場所について アンケート 対象 外国の方(15名)



写真④

Boomerang *Time Table*
 the best youth service and cafe ie
 September - December 2023

Tuesday	Girls Group Music Drop-in Comhairle Na Og Girls Group Music Drop-in	10-13Yrs 4.00- 5.30 10-13Yrs 4.30- 6.00 14-18Yrs 4.00- 5.30 14-18Yrs 6.00- 8.00 14-18Yrs 6.00- 8.00
Wednesday	LGBTQ Group Game Design Anime Group LGBTQ Group Songwriting Group	10-13Yrs 4.00- 5.30 10-13Yrs 4.00- 5.30 10-18Yrs 4.00- 5.30 14-18Yrs 6.00- 8.00 14-18Yrs 6.00- 8.00
Thursday	Boys Group One To Ones Music Boys Group Game Design	10-13Yrs 4.00- 5.30 10-18Yrs 4.00- 6.00 14-18Yrs 6.00- 8.00 14-18Yrs 5.30- 7.00
Friday	Music Production Games Club (RPG)	10-18Yrs 4.00- 6.00 10-18Yrs 6.00- 10.00
Saturday	Open Access Music Rehearsal	10-13Yrs 4.00- 6.00 10-18Yrs 2.00- 6.00
Friday Night Events Every Week		10-13Yrs 6.00- 8.00
Alternating 10-13yrs and 14-18yrs		14-18Yrs 7.00- 10.00

Follow us on social media Please visit our website
 Boomerang cafe ie

研究を通して、これらの課題だけではなく、好事例も多く、参考となる居場所が多々あった。くつろいで、好きなことをして、生き生きと目を輝かせて、自分らしく過ごす若者たちが溢れている居場所である。だが、そのような居場所は、身近にあまりない。居心地の良い居場所でも、遠く、利用者数も少ない。もっと多くの若者が、居心地の良い居場所を活用して、自分らしく過ごせたらとの思いを強くした。

改めて、「若者の生きづらさを減らすための第三の居場所は、いったいどうあるべきか？」を考えると、「なるべく多くの若者たちを対象とした、生きづらさを減らす居場所があったらよい」と言えるだろう。現在、家と学校との往復だけで、第三の居場所を持っていない若者たちも多い。生きやすくないと感じる8割の若者、2人に1人は孤独感を持ち、5人に1人は誰にも相談せず、3人に1人が自殺を考えたことがある。不安で、苦しくて、悲しい思いをしている若者たちの辛さを解消する居場所の在り方として、特に以下の二つの点が大切になると考えた。

一つ目は、身近に居場所があると良い。身近な居場所になりうる場所の候補を図③にあげてみた。身近な場所の案として、学校の放課後、小学校体育館、図書館、生涯学習センター、塾、ファストフード店、コンビニフードスペース、公園、路上、カフェ、ショッピングセンター、駅、デジタル空間等、人が気軽に集まれる場所が候補となる。通いやすく、活用しやすく、近所などの身近な場所で、多様な居場所があると良い。多様な既存の場所で、若者たちが、自分らしく過ごせる活動ができれば良いと考えた。

二つ目は、人が関わりあって、認め合う事で、生きづらさを減らし、幸福感を高めることが可能となる。子どもの居場所づくりの調査研究の検討委員会座長を務めた湯浅誠氏も「認められる場所に居場所感を抱く」とNHKの視点論点で述べている。今回、居場所について調べる中で、尊重しあい、認め合う気持ちで、人に元気をもらえずと実感した。認め合う事で、単なる空間が、安心して過ごせる居場所になっていた。第三の居場所は、一人でも参加しやすく、優しい声掛けで温かい気持ちに包まれ、ワクワクした気持ちになれ、素のまま、ありのままの自分が尊重され、互いを認め合える機会になれば良い。いつか、気軽に若者が集まれる社会になると良い。

これら二つを満たす第三の居場所を作っていくのは決して簡単ではない。様々な工夫を通して、居場所が作られ、若者がその場を知り、孤立した個人がゆるくつながることが重要になってくると思った。

6. 事後活動：行政・学生への発信

本研究では、若者の生きづらさを減らすための第三の居場所のあり方について、課題を明らかにし、解決策を検討した。研究により今後の第三の居場所作りがより若者のニーズに寄り添ったものになればとの考えで、本研究の内容を、行政の方々にお伝えさせていただき、地域の居場所支援に関わる方々と意見交換を行わせていただいた。どの関係者の方々も、若者からの率直な意見が聞ける機会になったと、高い関心をもって聞いていただき、双方を知り、情報交換する機会となった。

・名古屋青少年家庭課の担当者への提案(2023年12月)

なごや高校生まちづくりプロジェクト(写真⑤)に参加し、居場所作りの必要性とその方法案について他校の高校生と共に発表を行い、若者の声として市の担当者に伝えさせていただいた所 <https://www.city.nagoya.jp/kodomoseishonen/page/000157938.html>、次のコメントを頂いた。「令和6年度より中学生に居場所として利用してもらうために児童館の愛称選定や広報を強化していきます。また、若者向け施設に別の若者向けの居場所のチラシを配架・配布することで居場所の情報提供を行っています。行政から新たな居場所の提案というのは難しいですが、NPO法人等と協力して、高校生の居場所が欲しいという声に答えていきたいです。」

・名古屋都市センターでの活動「わたしにもできる！いきばしょづくり講座」を受講し、理想の居場所について学び、参加者の方達と考えた。それぞれの方達が求めている居場所の違いなども実感した。地域を良くしたい異世代の仲間が沢山いることを知った。また、身近で居場所作りを始めていく具体的な方法を知った。

・名古屋市西区の職員：名古屋市西区役所民生子ども課の居場所づくりの担当者に、居場所の研究結果資料をお渡しし、関係者の方達と共有していただいた。今後の地域の居場所作りについて、「参加する人が緊張せずに、サラッと交流できる仕組みが大切なのではないかと思っています。大変参考になりました。」とのメールを頂いた。

・名古屋青少年宿泊センターで働いているユースワーカーの方とも課題を共有し、居やすい施設の作り方、子どもや若者達の様子、施設の運営についてなど、居場所の在り方について様々な点において意見交換をした。

・名古屋市中村区社会福祉協議会の子どもや若者の居場所担当職員らと、中村区で活動をしている様々な居場所、喫茶店のPR活動、高齢者向けの居場所活動、子ども会の活動、学区における居場所について、ローカルな地元の状況について意見交換を行った。そこで、地域の方達が運営する新たな居場所について知り更に調査を行った。➡意見交換をして、自分の住んでいる地域の居場所は、教えてもらわないと知る機会がない事を知った。よって、地域の居場所を、必要な若者たちに伝えていく必要性を感じた。

7. 今後の活動：放課後の居場所活動 & 居場所を伝える活動

市内の居場所マップづくり：高校生の為の第三の居場所が全く知られていない為、高校生に居場所を伝える活動を行う。在学している高校の生徒たちに、居場所について伝えると、メモを取りながら場所の存在を知りたがる生徒が実に多かった。ニーズについては、「スタバに行かなくても無料で勉強できる居場所」「卓球、ギター、ボードゲームで遊び放題の場所」「駅から近くアクセスが良い」「ホッとできる場所」など、高校生によって響くポイントが異なるため、これら居場所の特徴が一目でわかり、行きたくなるような居場所マップづくりを今後作り、広報をしていく。

学校内の放課後の居場所づくり：新年度になり、校内の図書館を利用しても良いとの声掛けをしていただいたため、今後図書館の居場所づくり活動を進めていく。居場所活動としては、自分たちで出来て、楽しめる工作活動をする案もあり、手始めに、手作りのチャームづくりを放課後に小規模で行ってみたいところ好評であった。他の公立高校のように放課後カフェの予算がつかないのがカフェ形式は難しいものの、できる所から居場所活動を行なっていきたい。

高校周辺の居場所マップづくり：高校の周りをくまなくあるいて探検し、学校帰りに寄れる居場所(ジム、サウナ、カフェ、ファミレス、散歩道等)のマップ案を作成した。学校帰りに立ち寄れる魅力的な隠れた名店が居場所が、知られていないことから、これらの居場所を高校生達に伝え、学校と自宅以外で、ホッとできる場所が見つけれられるきっかけになればよいと考える。

8. 参考文献

- Biglobe(2019)『お金に関する意識に関する調査結果』¹
- 内閣府(2022)『子供・若者の意識と生活に関する調査』²
- 内閣府(2022)『子供・若者白書 令和4年度版』³
- 日本財団(2022)『第4回自殺意識調査』⁴
- レイ・オルデンバーグ(2013)「サードプレイス」⁵
- 内閣官房 子ども家庭庁設立準備室(2023)『子どもの居場所づくりに関する調査研究』⁶
- 港区子ども家庭支援部子ども若者支援課(2023)『港区高校生世代実態調査報告書』⁷ <https://www.city.minato.tokyo.jp/kodomokanmonchi/koukouiseisaku/documents/hokokuzo.pdf>

身近な居場所

- 学内カフェ
- 同好会・推し会
- 週末ボランティア
- フリタケ・カフェ
- デジタル空間
- マド・コンビニ
- スーパーマーケット
- エスニック料理店
- 駄菓子屋
- 図書館・児童館
- 公民館(24h)
- 社務所(伝統文化)

居心地の良い居場所になりうる場所

<p>我が家の庭先 区役所スペース 駅のスペース 路上・古民家 塾・習い事 クラブ 子ども食堂 ユースセンター プレイグラウンド 子ども会・益隣り ボーイスカウト 無料塾</p>	<p>スタジオ(音楽) 公園(ゆめ)・飛行機 体育館(スポーツ) 博物館・企業見学 生涯学習センター(料理) 趣味・関心事の仲間 ゲーム・アニメ・動画 ペット・占い・心理 ネイル・ヘアスタイル キャンプ・ボート・サイクリング ハイキング・旅</p>
---	--

図③

多様な居場所ができる
と良いな

いきばしょづくり講座
実施中。2023年2月
資料を基に表記

認め合う

どのようになさるべきか
個人で考える

自分らしくいられる
尊重されない
認められる

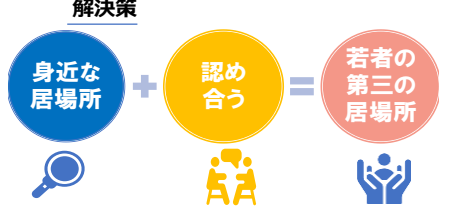
安心できる場所
整った環境
支援

認め合う 場所！

会話
優しい声掛け

ワクワク楽しい
楽しい活動

解決策



写真⑤